【別紙 1】調査成果の概要

竹島を記載した『石見外記』のうち原本に近い写本の発見について

1．調査者

船杉力修　島根大学法文学部准教授（歴史地理学）

升田優　　島根県竹島問題研究顧問

2．調査期間　2020 年 10 月～2021 年 9 月

3．調査場所　浜田市、大田市、松江市、東京大学総合図書館など

4．特記事項

（1）『石見外記』は、浜田藩の儒学者で、浜田藩の藩校長善館の教官であった中川顕允（あきすけ）（宝暦 11（1761）～天保 4（1833））が記した石見国の地誌である。石見国の地誌では、文化 14（1817）年自序の『石見八重葎』（いわみやえむぐら）と並び称せられる。全 4 巻である。文政 3（1820）年 10 月の自序があり、また、文政 10（1827）年 5 月に江戸で近江国朽木谷の領主で旗本、そして蔵書家としても有名であった、朽木綱泰（くつきつなひろ）の序文を得ていることから、文政 3（1820）年から文政 10 年（1827）までの成立であるとみられる。『石見外記』所収の地図「大御國環海私圖」（おおみくにかんかいしず）には、摂津国兵庫湊の高田屋嘉兵衛の廻船が蝦夷地へ向かう際に、竹島（現在の鬱陵島）と松島（現在竹島）の間を通ったことが記されている。

（2）領土問題の調査研究を行っている日本国際問題研究所から、竹島の古地図の調査研究を委託された、船杉力修島根大学法文学部准教授が、令和 2（2020）年 10 月、東京都内の古書店で、『石見外記』の江戸時代の写本が販売されているのを見つけた。そこで、令和 2 年度の日本国際問題研究所からの島根大学への受託研究「古地図からみた竹島の地理学的研究（含、古地図のデータベースの構築及び報告書の作成（令和 2 年度））」の経費で購入した。調査の結果、『石見外記』の写本のなかでも、原本により近い写本であることが判明した。筆写年代は不明であるが、江戸時代の写本であるとみられる。

（3）これまで地元の写本としては、浜田市立図書館所蔵本及び昭和 48（1973）年石見地方未刊資料研究会の復刻本、島根県立図書館所蔵本（浜田市立図書館所蔵本の筆写本）1）などが知られており、これまでの研究では、昭和 48（1973）年石見地方未刊資料研究会の復刻本が主に使用されてきた。

（4）今回購入した本には、蔵書印と所蔵者の名前の記載がみられる。蔵書印は各巻の巻頭にあり、「藤浪氏藏」とある。国文学研究資料館の「蔵書印データベース」によると、「蔵書印主　藤浪剛一」、「蔵書印主よみ　ふじなみこういち」、「印主職種／時代　学者・教育者（近現代），医家 ／ 近代」、「人物情報　◆号乾々斎。1942（昭和 17）没、年 61。愛知県人。慶応大学教授。医史学の研究に詳しく、医書の蒐集に知られる。慶応大学に旧蔵の曲直瀬（まなせ）文書収蔵。1943（昭和 18）「乾々斎架蔵和書目録」刊。「乾々斎書屋」（しょおく）印は印刷紙票。（「近代蔵書印譜」による）△藤浪剛一（1881～1942）は明治～昭和前期の医学者。家は尾張藩医。慶應義塾大学医学部の理学的診療科教室（放射線

医学）の初代教授。第 4 代日本医史学会理事長。その蔵書の多くが本書屋に入っている。（「杏雨書屋の蔵書印」による）」とある。藤浪剛一氏の妻和子氏が昭和 18（1943）年に編集、発行した『乾々齋架藏和書目録』には『石見外記』は記されていない 2）。なお、『乾々齋架藏和書目録』の序には、「故人は忙がしい中から閑をつくり、一冊ごとに蟲を拂ひ、破損をつくろひ、帙に入れて、藤浪文庫の印を押した。乾々齋は書屋の名である、何十年來つゞいた。勿論學問上の研究資料が主であるが、やがては愛書癖とも見られる古書をあさつたりもした。書籍を大切にしたのは學問に對して著者への敬慕の念が深くてした事で、もの好きの書物いぢりではなかつた。物を集めることが進むと、やがてそれをひとりで愉しむよりは、人と共に愉しみたい、さういう氣持に移つて行くものらしい」とある。

（5）所蔵者の名前は、巻二と巻三の巻末にあり、巻二には、「嶋根県邇摩郡大森　熊谷氏」、巻三には「邇摩郡大森　熊谷氏」とある。所蔵者の名前の文字と本文の文字は明らかに違っている。大森、石見銀山の熊谷家といえば、代々家業である大森の鉱山経営、金融業、酒造業のほか、大森代官所の掛屋・郷宿・御用達なども行う、石見銀山で最も有力な商人であった 3）。筆跡から熊谷氏のどの当主のものであるか今後検討が必要である。「嶋根県」の記載から、熊谷家が所蔵していたのは、明治から昭和初期であると考えられる。ただし、藤浪剛一氏と熊谷家のどちらが先に所蔵していたのかは、現時点では不明である。

（6）『石見外記』の巻四の「石見海」に、「大御國環海私圖」、すなわち、わが国及び周辺の地図が収録されている。日本国際問題研究所所蔵本【別紙 2】と、浜田市立図書館所蔵本【別紙 3】4）、石見地方未刊資料研究会の復刻本と記載内容を比較すると、日本国際問題研究所所蔵本は、本の装丁が丁寧で、また文字が丁寧であるほか、該当地図の外側には枠が記され、地名など記載内容が多いことが分かった【別紙 4】。一方、浜田市立図書館所蔵本、石見地方未刊資料研究会の復刻本は、文字の記載が粗雑で、地図の外側に枠がなく、地名などの記載が省略されていることが分かった。両者の記載内容の比較検討を行った結果、写本の系統は日本国際問題研究所所蔵本が原本に近い A 系統の写本、浜田市立図書館所蔵本と石見地方未刊資料研究会の復刻本は、地元石見で筆写された B 系統の写本であると考えられる。「大御國環海私圖」のほか巻二の「石見海幷斗浦ノ圖」のうち、外ノ浦（浜田市）の地図にあたる「斗浦圖」でも、A 系統では「ミナト」の記載があるにもかかわらず【別紙 5】、B 系統ではその記載がなく【別紙 6】、A 系統で「コンヒラ」（金刀比羅）とするのを「コシヒラ」とするなど、B 系統には記載の間違いがみられる。このほか、A 系統の写本としては、東京大学総合図書館 5）、国立公文書館（明治 8（1875）年写）、西尾市岩瀬文庫（愛知県）、大和文華館（奈良県）、島根県立古代出雲歴史博物館などに所蔵があることが確認された。

（7）竹島問題との関係では、『石見外記』所収の「大御國環海私圖」には、日本海に竹島（現在の鬱陵島）、松島（現在の竹島）が記載されている。竹島と松島の南には、北西から南東方向に線が記され、線の横には「此ハ西アナジノシルシナリ」とあり、この付近では、船の航行を妨げる冬の北西風である「アナジ」が吹いていることが記されている。

（8）さらに、「大御國環海私圖」には、地図の右側に注記があり、竹島、松島の記載がある。これまで研究に使用されてきた、B 系統の写本では、「高田屋嘉兵衛カ商船ハ朝鮮海ニ出テ蝦夷地へ乗ルトソレハ、下ノ関ヲ出帆シテ戌亥八リ（里）ナカシ、松竹二島ノ間出テ転メ、丑寅ヲ目アテニ乗リシニハアラス」とある 6）。すなわち、「高田屋嘉兵衛の商船

が朝鮮沿岸に出て、蝦夷地へ乗る時は、下関を出帆して、戌亥（北西）の方向に 8 里流して、松島と竹島の間に出て方向を転じて、丑寅（北東）方向を目標に乗ったのではない」とあり、特に最後の箇所について、文意が通らなかった。しかしながら、今回発見、購入した、日本国際問題研究所所蔵本をはじめ、A 系統の写本では、いずれも最後の箇所が「丑寅ヲ目アテニ乗リシニハアラサルカ」とあり、正しくは「丑寅（北東）方向を目標に乗ったのではないか（＝乗った）」という意味であることが判明した。すなわち、「下関を出帆して、戌亥（北西）の方向に 8 里流して、松島と竹島の間に出て方向を転じて、丑寅（北東）方向を目標に乗ったのではないか（＝乗った）」というのが正確な意味であった。したがって、淡路島出身で、摂津国兵庫の廻船業者高田屋嘉兵衛の帆船は、蝦夷地を目指す際には、日本海で竹島、松島を航海の目印にして北東方向へ進んでいたことを改めて確認することができた 7）。したがって、『石見外記』のうち。原本に近い系統の写本の発見により、当時松島（現在の竹島）は異国とは認識されず、日本領と認識されていたことを改めて確認することができた。すなわち、この資料は、竹島がわが国固有の領土であることを補強する資料であるといえる。

5．その他

日本国際問題研究所所蔵の『石見外記』所収の「大御國環海私圖」のパネルは 10 月 8 日から、島根県竹島資料室で展示する予定である。また、日本国際問題研究所所蔵の『石見外記』は、今後石見地方での展示を検討中である。さらに、日本国際問題研究所所蔵の『石見外記』は、竹島問題でも重要な資料であるため、今後復刻版の作成を検討している。

＜注＞

1）奥書によると、「原本那賀郡浜田町立図書舘本によりて、カーボンペーパーによりて三部寫本之内壱部」とある。

2）昭和 14（1939）年 6 月 20 日東京朝日新聞記事「蒐集譚（終）　大高源吾の珍筆　貴重な醫書の金看板　藤浪博士談」）によると、「お墓、温泉、古地圖、醫學書の古典などの研究蒐集家としてあまりに有名な慶大教授藤浪剛一博士」とあり、目録には、医学書や温泉関係の文献は入っているものの、古地図等は出ていない。なお、乾々齋文庫は、昭和 19（1944）年頃にまとまって杏雨書屋（きょうゆしょおく）（現在、武田科学技術振興財団杏雨書屋）に購入されたとされる。

3）島根大学附属図書館所蔵の熊谷家文書には、石見国の地誌である『石見六郡記』がある。

4）巻末に「濵田市立図圖書館之印」の蔵書印があるほか、巻 1 の冒頭には「濵田圖書館印」の蔵書印がみられる。浜田市立図書館の前身である、浜田図書館（私立図書館、明治 34（1901）年～大正 14（1925）年）時代にはこの本を所蔵していたことが確認できる。ただし、冒頭の朽木綱泰の序文で、「江州朽木谷」とすべきところを、この本では「江州朽本谷」とし、大きな間違いがみられる。

5）2 つの蔵書印、「屋代藏奔之印」と「紀伊亳川　南葵文庫」がみられる。「屋代藏奔之印」は不明。南葵（なんき）文庫は、旧紀州藩主徳川頼倫（よりみち）創立の文庫で、明治 35（1902）年麻布飯倉の自邸に設立した私設図書館である。紀州徳川家伝来の 2 万冊を中心に文庫を設立し、家蔵本に加え、購入・寄贈により蔵書を増やした。頼倫は、大正

12 年（1923）の関東大震災により全焼した東京帝国大学附属図書館に蔵書を寄贈し、文庫は閉館となった。

6）島根県立図書館所蔵本（浜田市立図書館所蔵本の筆写本）では、「丑寅ヲ目アテニ乗リシニハアラズ」の後に、筆写者が赤字で「ヤノ字ノ脱カ」と加筆し、「アラズヤ」、すなわち「乗ったのではないか（＝乗った）」と解釈している。

7）参考までに、昭和26（1951）年、海上保安庁発行『近海航路誌』所収「航路図」（本州東岸、日本海）を掲載する【別紙7】。鬱陵島、竹島周辺の航路が記載されている。実際には、下関を出た後、北北東方向へ進み、鬱陵島と竹島の間へ向かい、北東方向へ進み松前へ向かったと考えられる。あるいは、下関から北西方向へ進み、韓国の浦項近くの長鬐（チャンギー）岬（現在虎尾串（ホミゴッ））方面へ向かい、その後北東方向へ進んで、鬱陵島と竹島の間を通り、松前へ向かった可能性もある。航路については今後の課題である。